鎮守の杜（もり）の散歩道

東松山の気になる神社（やしろ）探訪

第１３期　国際・文化学部Ｂ班

本郷 操 茂木美緒 ◎渡邉勝則 山本繁夫 ○鈴木正弘 占部智雄 小川哲身 ○松本重敏
佐渡幸子　丸山房子　鈴木節子　間山聖子　芝﨑良一　岩崎　勝
◎リーダー　○サブリーダー

目次

１．選定理由
２．神社の基本
　１）神社・神様の発生
　２）神道と仏教の違いと関連
　３）神社の配置と参拝
３．神社の系列と信仰
４．市内の神社
　１）東松山市の地区別神社一覧表
　２）東松山神社マップ
５．気になった神社の紹介
　松山神社（日吉町）　菅原神社（字松山）　熊野神社（東平）　大雷神社（大谷）
　秋葉神社（大谷）　玉太岡神社（岡）　利仁神社（下野本）　氷川神社（下青鳥）
　鷲神社（古凍）　若宮八幡神社（石橋）　唐子神社（下唐子）　高坂神社（高坂）
　八幡神社（宮鼻）
６．まとめ

課題研究の経過記録

番号	月　日	学　習　内　容	場　所
1	1 月 21 日	Ｂ班編成 グループリーダー及びサブリーダー選出	きらめき市民大学
2	2 月 15 日	12 期生の課題研究発表会に参加	松山市民活動センター
3	2 月 25 日	課題テーマ（案）検討 「ふるさと東松山の伝統文化」	きらめき市民大学
4	3 月 11 日	テーマ内容の検討・活動計画決定 松山浅間神社探訪	きらめき市民大学 松山地区
5	4 月 15 日	テーマ内容の再検討（各自発表） テーマ決定「東松山市の神社」	きらめき市民大学
6	4 月 17 日	大岡地区神社・東平熊野神社実地調査	大岡地区
7	5 月 8 日	唐子・高坂地区神社実地調査	唐子・高坂地区
8	5 月 27 日	箭弓稲荷神社を訪問し宮司より講義 野本地区神社実地調査	箭弓稲荷神社 野本地区
9	6 月 3 日	各自調査対象の神社を検討	きらめき市民大学
10	6 月 10 日	各自調査対象の神社を決定	きらめき市民大学
11	6 月 17 日	各自テーマのまとめ方を検討 埋蔵文化センター訪問	きらめき市民大学 埋蔵文化センター
12	6 月 30 日	箭弓稲荷神社の「茅の輪くぐり」見学	箭弓稲荷神社
13	7 月 8 日	テーマの作成内容について検討	きらめき市民大学
14	7 月 13 日	松山浅間神社祭典見学（初山）	松山浅間神社
15	7 月 26 日	唐子神社祭典・獅子舞見学	唐子神社
16	8 月 21 日	各自作成資料の内容検討	きらめき市民大学
17	9 月 2 日	各自作成資料の内容検討（挿入写真）	きらめき市民大学
18	10 月 21 日	課題研究纏め全体構成を検討	きらめき市民大学
19	11 月 4 日	原稿の編集・校正　全員の写真撮影	きらめき市民大学
20	11 月 21 日	原稿の最終案検討	きらめき市民大学
21	11 月 25 日	最終まとめ	きらめき市民大学

１．選定の理由

私たち国際・文化学部Ｂ班はきらめき市民大学の目標である「まちづくり」「地域社会」「生涯学習」をキーワードに市内の文化、伝統、食等のテーマから議論に入りましたが、意外と知らない「神社」に関心が高まりました。そこで資料により調査した結果、市内に４１の神社があることが分かり、それぞれの歴史、伝統、文化を知りたいという思いからテーマを決定しました。

今回は市内の神社から地区別、系列別等を考慮して１３の神社を探訪・調査してみることにして、神社巡りからのスタートとなりました。大半は未知の場所で、そこには「鎮守の杜」がたたずみ、大木、河川、台地があり地域社会がありました。地域と共に歩んできた神社の歴史、宗教観など「なるほど」と思う発見の連続で、今更聞けない神社の常識、知らない言葉も沢山ありましたが、今回の調査で少しずつ分かってきて「神社の魅力」の一端を垣間見ることができました。

市内の多くの神社が主要道路から入った所にあり、日中は誰も人がおらず閑静で寂しさが漂っていたものの、祭事になると人々が集まり地域社会と融合し、大人から子供に至るまで一体になって伝統を受け継いでいました。

２．神社の基本

１）神社・神様の発生

①神道とは何か

日本の最も旧い宗教であり、古代から日本の風俗習慣にとけ込み、自然界からの力（山、森、河川、太陽等）に神聖さを感じ祭礼や礼拝をおこなって、それが神様になり神道へつながっていく。

②神社の成り立ち

仏教の伝来、古事記、日本書記などの影響が大きく自然界の力を神様と仰ぎ信仰形態ができるに従い、仮設から移動へそして施設（常設の神社）となり、更に分霊により増大していく。八百万（やおよろず）といわれ無限分割に拡大され現在も８万社あるとされている。

③御神体とは

神社はもっとも神聖な場所に御神体を奉納している。御神体とは神道で神が宿るとされる物体が礼拝の対象となり、依り代、御霊代ともいわれる。それは自然界の森羅万象（山、巨石、森）であり、神器、御柱であり、神話、実在の人物も含まれるが目に見えないものも多くある。

２）神道と仏教の違いと関連

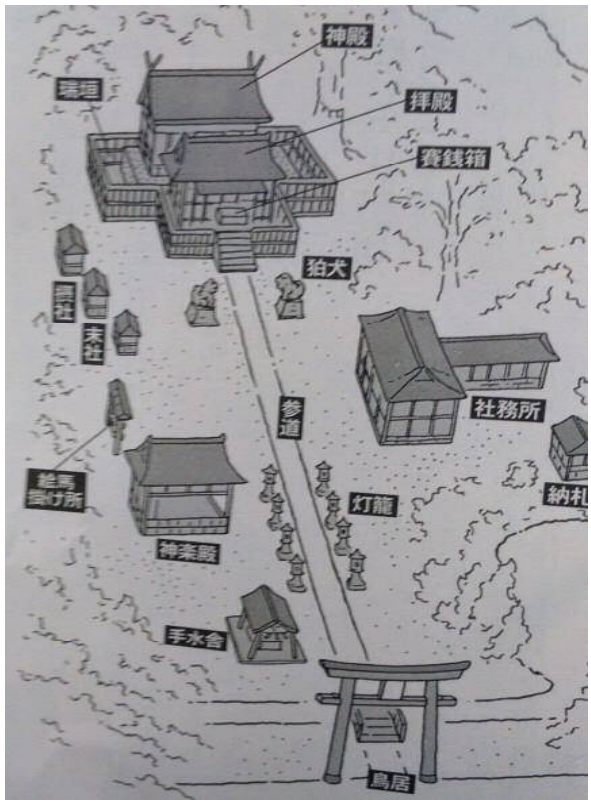
①神社とお寺の違い

神社は神様の御霊を祀る場所、お寺は仏尊像を安置し仏教の教えを説く場所である。神社（神様）とお寺（仏様）を比較すると以下の表となる。

	神社	お寺
開祖	なし	釈迦
聖典	祝詞（神話　古事記　日本書記）	経典
崇拝対象	見えない 自然界からの霊性（祭神）	見える 仏像（本尊）
門	鳥居	山門
社寺数	８万社	７万７千寺
神主・僧侶	７万７千人	35 万人

②神仏習合思想
今でも各家庭では仏壇があり、神棚があり同時に信仰しているケースが多い。神様仏様は当然のように両立しているが、これは奈良時代よりの神仏習合思想のなごりである。仏教の伝来後、奈良時代に入ると神仏習合の思想が広まり、神が仏教を護る存在となる。神と仏をはっきり区別しない考えも多く、それは江戸時代まで続く。神社とお寺は補完関係にあったようで、今でも神社の近くにお寺が見受けられる。
③神仏分離令とその後
明治時代の神仏分離令によりお寺との関係が離れるも、国家宗教として保護され優遇されていき、戦後は一宗教法人として運営されていく。
近年は都市部や一部有名神社は盛況だが、地方では氏子減、後継者難、収入減による厳しい運営が現実のようである。

３）神社の配置と参拝
基本的な神社の配置
・鳥居：神社の門　軽く一礼して潜る
・手水舎(てみずや・ちょうずや)：身を清める
　a. 右手で柄杓を持ち左手を洗う
　b. 左手に持ち替えて右手を洗う
　c. 右手に持ち替え左手に水を受けて口を漱ぐ
・参道：中央は神様の通り道
・灯篭：灯りを捧げる
・狛犬：雌雄で一対(開口と閉口)
　阿吽（あうん）の呼吸
・拝殿：儀礼、礼拝する場所
　二礼二拝一礼
・本殿：祭神が座す場所



３．神社の系列と信仰

信仰	関連	総本宮・祭神	神社概数	信仰
八幡		大分宇佐神宮 応神天皇	40,000	安産子育て・縁結び・武家の守護神（源氏）
稲荷		伏見稲荷 ウカノミタマの神	32,000	五穀豊穣
伊勢	神明社	伊勢神宮 天照大神	18,000	日本の総氏神 皇室の神様
天神社	天満宮　菅原神社	北野天満宮 菅原道真	12,000	学問の神様
氷川	天王　祇園　八雲	大宮氷川神社 京都八坂神社 スサノオ命	210（武蔵国） 6,000	災害・五穀豊穣 防疫神・天王様 牛頭天王（ごず）
熊野		熊野本宮大社	3,300	山・滝
諏訪		諏訪大社	10,000	水・風・軍
白山		白山比咩神社 しらやまひめ	3,000	山岳信仰
日吉	日枝　山王	日枝大社（比叡山）	3,800	山の神・山王様
鷲	大鳥	鷲宮神社 堺大鳥大社 ヤマトタケル命		五穀豊穣・白鳥 酉の市
浅間		富士山本宮浅間大社	1,300	富士山・火山 初山
秋葉 愛宕		浜松秋葉神社 京都愛宕神社	800 900	火伏・防災 火の神
出雲	子神社：金毘羅・琴平・鷺 （他の祭神等出雲出身は多い）	出雲大社 大国主命 （大国様）	2,270	社格は伊勢神宮と並ぶ 縁結び・福の神

＊現在８万社と言われているが合祀、末社・摂社等含んだ概数である。

・合祀：二つ以上の信仰形態を合わせて祀る

・分祀：勧請―同祭神を別の場所にも設けて祀る

・末社：摂社―同敷地内に別の信仰形態の祭神を祀る

４．市内の神社

東松山市の地区別神社一覧表（４１社）

No.	地区／名称	系列	町名	No.	地区／名称	系列	町名
	松山地区９社				野本地区１１社		
1	箭弓稲荷神社	稲荷	箭弓町	２０	鷺大神社	出雲	柏崎
2	松山神社	氷川	日吉町	２１	氷川神社	氷川	上野本
3	日吉神社	日枝	日吉町	２２	八幡神社	八幡	上野本
4	八雲神社	八雲	野田	２３	日枝大神社	日枝	下野本
5	八幡神社	八幡	松葉町	２４	天神社	天神	下野本
6	菅原神社	天神	字松山	２５	利仁神社	利仁	下野本
7	氷川神社	氷川	市ノ川	２６	氷川神社	氷川	下押垂
8	赤城神社	合祀	野田	２７	氷川神社	氷川	下青鳥
9	熊野神社	熊野	東平	２８	天神社	天神	下青鳥
				２９	鷲神社	鷲宮	今泉
	大岡地区４社			３０	鷲神社	鷲宮	古凍
１０	大雷神社	稲荷	大谷				
１１	秋葉神社	秋葉	大谷		高坂地区１１社		
１２	玉太岡神社	合祀	岡	３１	高坂神社	合祀	高坂
１３	諏訪神社	諏訪	岡	３２	小剣神社	合祀	早俣
				３３	御霊神社	合祀	正代
	唐子地区６社			３４	八幡神社	八幡	宮鼻
１４	若宮八幡神社	八幡	石橋	３５	愛宕神社	愛宕	宮鼻
１５	氷川神社	氷川	上唐子	３６	小田原神社	合祀	田木
１６	唐子神社	合祀	下唐子	３７	熊野神社	熊野	岩殿
１７	神戸神社	合祀	神戸	３８	天神社	天神	元宿
１８	葛袋神社	合祀	葛袋	３９	神明社	伊勢	毛塚
１９	白山神社	白山	上唐子	４０	浅間社	浅間	西本宿
				４１	拂田稲荷神社	稲荷	高坂

※系列は参考で合祀、末社の神社が多くある。

系列	信　仰	数	系列	信　仰	数
八幡神社	安産、縁結び、武家守護神	4	氷川神社	災害、五穀豊穣	6
天 神 社	学問	4	日枝神社	山の神	2
鷲 神 社	五穀豊穣	2	熊野神社	山・滝	2
地 区 名		5	単　　独		１６

東松山神社マップ

フォレストG
407
沼黒
257
熊谷市
391
⑬
福祉医療センター
太陽の園
⑫
玉太岡
川越CC
⑩
大雷
小川谷
東松山病院
66
307
比丘尼山横穴群
⑪
秋葉
大里宵山局
長島記念館
宵山
電成興業
福聚寺
八幡神
173
東松山CC
④
滑川町役場
407
⑨
熊野
西明寺
⑧
比企郡
八丁湖公
66
吉見町
羽尾
老人ホーム森林園
両家
⑦
⑥
菅原
八坂神社
吉見マン
市民体育館
⑤
東松山市役所
②③
松山
吉見百穴
東松山工業団地
新郷
⑲
①
箭弓
医師会病院
西吉見
254
東松山保健所
⑮
⑭
若宮八幡
⑯
唐子
⑳
市野川浄化セン
407
下野本
㉗
氷川
㉒
㉓
㉚
鷲
㉕
利仁
㉔
㉘
⑰
松山CC
キタザワ
⑱
高坂
下青島
大谷整形外科
今泉
神戸
高本山配水場
東松山橋
㉖
㉙
清澄GC
㊵
西本宿
西福寺
高坂CC
氷川神社
㊲
石坂
物見山
㉛
高坂
㉜
㉝
㊶
㉟
㉞
宮鼻八幡
㊳
こども動物
自然公園
㊱
東蔵寺
成就院
小田原神社
松ヶ丘
㊴
島田

松　山　神　社（日吉町）

おひかわさま

1．歴史

旧松山宿の北部に位置する上沼の西南端から、西に続く長い参道を入って行った処に、杜に包まれて鎮座している。その為、市街地の中の神社にしては閑静で落ち着いた雰囲気があるところから、上沼公園と共に憩いの場として、又、散策の場として市民に親しまれており、祭日以外でも境内を訪れる人は多い。

武蔵国一の宮の氷川神社（大宮市）に代表されるように、古くから荒川の流域の町や村では、氷川神社が多く祀られてきた。毎年のように繰り返される荒川の氾濫を鎮めるためには、氷川様（須佐之男命）のように霊威の強い神を祀ることが必要であったとの「言い伝」を耳にすることが多い。当神社も又、そのようにして祀られた社の一つであると考えられ、その創建は今を去ること950余年の昔、康平6年（1063）にさかのぼると伝えられている。

神仏分離を経て明治6年に村社となった当神社は、同16年4月に至り、社号氷川神社熊野神社（合殿）を松山神社と改めた。これは、松山宿の総鎮守として祀られてきた当神社を松山町の象徴として盛り立てていこうという氏子の気持ちを反映したものであり、昭和20年には郷社に昇格した。

2．信仰

当神社の恒例の行事は、元旦祭・祈年祭・節分祭・大祓・例大祭・七五三祭・晦日の祓の7つである。更に境内の末社の祭りとして、12月15日に商売の神様である大鳥神社で行われる酉の市は、露天が立ち並び威勢の良い声が飛び交う中、縁起物の熊手などを求めて大勢の人が訪れる。子育ての神である浅間神社では7月14日初山祭りが行われる。これは、この1年間に生まれた赤ちゃんの健やかな成長を願って行う行事である。お参りした子供は、額に「しるし」を神主に押してもらう。市内外から赤ちゃんを連れた多くの方々が訪れ、中にはびっくりして泣き出す赤ちゃんや、祖父母と共に笑顔で参拝するご家族の賑やかな風景は初夏の風物詩である。

上沼を隔てた飛び地境内にある市神として、又厄除けの神として信仰厚い八雲大社は4面すべて欅の彫刻で飾られている。正面は花・鳥・竜・唐獅子、左右に神話の世界が彫られ、見る人を圧倒する。往時は、ここに住む人の守り神だったことが伺える。7月に行われる祭りは古くから天王様と呼ばれ、市街地を中心に行われ、各町内では祭ばやしを演奏しながら屋台を繰り出して引き回し、神輿が練り歩く賑やかな祭りである。

菅 原 神 社（字松山）

菅原神社を訪れたその日は雨上がりで、いまを盛りと咲く紫陽花に雨粒が残り、紫や紅などの艶やかな色彩を醸しだしていた。

当社はかって松山城の城下町として栄えた「元宿」と呼ばれる地域に鎮座し、鴻巣街道と北吉見とを結ぶ「中道」沿いにある。

創建は応永年中（1394～1428 年）で別当観音寺を開山した「忠良」なる者より行われた。明治初年観音寺は廃寺となる。祭神は菅原道真公で現在内陣には菅公坐像が安置されている。この像は明治 35 年 4 月「菅公 1 千年祭」を記念して、東京美術学校教授の竹内氏に依頼し製作された。信仰は学問の神様、合格祈願神社として多く知られているが、和歌、漢詩など優れたものが多数残されている。

東風吹かば　　匂ひをこせよ　　梅の花
　　主なしとて　　春な忘れそ

は余りにも有名。

「梅紋」は道真公、天満宮の象徴として使われている。

祭典日

1 月 1 日　　元旦祭
　　商売繁昌　交通安全　　家内安全

旧正月 25 日　「一奉納大自在天満天神宮御宝前」と書いた半紙を篠竹に付け当社に供え学業成就を祈る。近年は見られない。

3 月 25 日　　祈年祭（春祭り）

10 月 25 日　　秋季例大祭　（お日待）

12 月 25 日　　感謝祭　（新嘗祭）　宮中祭祀のひとつ五穀豊穣を祝う

これらの祭りは各戸から粳米を集め、団子を作り神前に供える習わしがあった。祭典が終わると参拝者に配られ、食べると学業成就　無病息災の御利益があると云われていた。

祭神菅原道真公は、承和 12 年 6 月 25 日（845 年 8 月 1 日）誕生、醍醐天皇の右大臣まで昇ったが、太宰府に左遷され延期 3 年 2 月 25 日（903 年 3 月 26 日）現地で没した。死後天変地異が多発したことから、朝廷に祟りをなしたとされ天満天神（道真の心霊に対する信仰）として信仰の対象となる。とりわけ当社に深いかかわりを持っていたものが初丑である。4 月最初の丑の日に行われる厄病除けの祭事で天満天神の使者が牛であることから厄除けの神として、信仰の厚かった牛頭天王にあやかったと思われる。神使(祭神の使者)の狛牛は、道長公が生まれも死没も丑年だったからだと云われている。

熊 野 神 社（東平）

祭　神　熊野権現（紀州熊野三社）

鳥　居　神社のシンボルである鳥居は神社によりそれぞれ形式がある。

　大きく分類すると明神系鳥居と神明系鳥居に分類される。熊野神社の鳥居は神明系鳥居でその中の靖国鳥居と呼ばれるものである。

社　殿　社殿の造りも大きく六つに分類されるが、熊野神社の社はその中の八幡造りで、特徴は前後に並ぶ二つの社殿をつなぐ形である。

　社殿の入口には妻入りと平入りの2種類があるが、本神社は本棟に対し平行な面にある平入りと呼ばれる形である。神社の屋根には日本発祥ではないとして瓦は使われないとされるが、ここでは瓦が使われている。

狛　犬　本殿の前には狛犬が置かれているが、由来を調べると古代オリエントからインド、中国、朝鮮（高麗）を経由して伝えられたものである。

歴　史　天慶3年（940年）に東国で反乱を起こした平将門を追討するために都を発った藤原秀郷が、上州碓氷峠で南の方にたなびく紫雲を尋ねて行くと、紀州熊野三社を祀り、その神徳を頂いて戦えば朝敵を必ず滅ぼすことができ、汝の子孫は世々栄えるとの不思議な夢を見た。翌朝秀郷が、はるか南方に紫雲がたなびくのを見てそこを尋ねて行くと、一株の松の根元から雲が湧き上がっており、これこそ神のお告げと秀郷は持っていた鏑矢をその松に立て仮に熊野三社を祀った。

　この場所こそが東平にある熊野神社の地であった。その後秀郷は武功を遂げ、乱平定のあと、神恩に報いるため伽藍を建立したと伝えられる。その後明治41年に宇沢口の熊野神社他7社が合祀された。

祭　り　祭りは年5回で、元旦祭・記念祭(4月１日)・例祭（7月14・15日）新嘗祭（10月15日）・冬至祭（12月22日）の順に行われる。元旦祭では氏子により境内に大きなが穴が掘られ、古いお札をお焚きあげする習慣がある。（住宅地に隣接するので火事防止のためと考えられる）

氏　子　その昔千葉城主であった平忠将は朝憲を軽んじたため、源頼信に追討されたが、忠将の子孫は逃れてこの地に隠れ住んだ。以来平一族の隠棲地ということで平村と呼ばれた。同一郡内に別の平村（現都幾川村）があり区別するために東平と呼ばれた。東平は川西、川東の二地区と東平新田を加えた地域が氏子となっている。

　最近は新興住宅地として住民が増加し、氏子になる人たちが増えているようである。また東平は梨の産地としても有名である。

大雷（だいらい）神　社（大谷）

当社の社殿は、大谷地区三千塚古墳群の雷電山古墳と呼ばれ、五世紀に築造されたと推定されるその墳丘山に築かれている。また社殿の周囲からは、埴輪や土器などが数多く出土しており、公民館に展示されているので、容易に見ることができる。社伝によれば、神階を授与された神々の中で「武蔵国従五位下若雷神従五位上」といわれるのが当社であるという。この地は山間の地であるため古代から水利の便が非常に悪く、五穀の実りも悪かったが大雷命を祀って以来五穀もよく実るようになり、盛夏干ばつの折には村民を挙げて降雨祈願を行ったとの伝承がある。

江戸時代、当社は少なくとも２回再建されている。一度は近郷近在２７か町村の人々によって再建されたと伝えられている。しかし、山火事が元で炎上してしまい、再建されたのが現在の社殿である。

祭事は年５回、元旦祭、例祭、田植終了奉告祭、夏祭り、新嘗祭が行われる。干ばつの年には、これらの祭事のほかに雨乞いが行われた。干ばつの激しい年には、大雨乞いも行われた。大雨乞いは、大正の初期を最後に行われなくなったが、干ばつ時には、今でも雨乞いを行っている。当社は、また相撲が盛んであったことも知られている。江戸時代、県内各地では、豊作の年の祭礼には江戸から力士を招き、相撲が興行されるようになった。その中でも当社の奉納相撲は、明治１０年ごろまで、常に江戸での一流の力士が火花を散らす熱戦が繰り広げられた。相撲場は２箇所あったが、一か所現存している。

大谷は、古くは「大屋」とも書き、比企丘陵の山間の農業地域である。この地は、比企能員が住んだことで知られており、地内の城ケ谷にはその館跡がある。また、源頼家の死後、若狭局がその遺骨を埋め、供養のために庵を結んで隠棲した比企尼山などもある。

当社の氏子は、大谷地区全域にわたっている。雷難除講の参詣日は４月１２日で参拝者は、雷除け神礼を受け取っている。四つの階段を上ると社殿に着くが、よく管理されていて神聖な場所、神社に来たと認識させられる。しかし、神社の位置がゴルフ場の中にあると言うのが残念である。雷電山古墳、相撲場どれも大谷地区の貴重な資料であり、今後、見学路の整備等、市、ゴルフ場などに協力してもらい観光名所となるよう期待したい。

秋　葉　神　社（大谷）

鎮座地は大谷集落の北、小高い丘の懐にひっそりとたたずんでいる。秋葉神社といえば「火の神様」のイメージが一般的だが、この社もご他聞に漏れず火事に関する逸話が残っている。江戸時代、享保年間の大火の際に徳川氏の旗本としてこの地を治めた森川氏の江戸屋敷だけが、孤島のように焼け残り難を逃れた。これも日頃崇拝する秋葉大権現のお陰であると感謝し、老朽化した社殿を造営するとともに御供米を寄進し、それ以来益々「火伏せの神様」として信仰を集めた。

明治になると養蚕の祈願や参詣も盛んに行われ、五月の初酉に近郷近在から集まって拝殿で祈願を行い、竹の小枝に「繭玉」と「秋葉神社養蚕倍盛」と書いた小旗が縁起物として授与された。酒を酌み交わしながら、奉納される神楽や八木節をお籠をして楽しんだと言われている。養蚕と秋葉神社との関係は定かではないが、養蚕は家屋で大切に育てるため、やはり火事が一番の大敵であることから、火伏せと共に秋葉信仰に繋ったものと思われる。

本社は秋葉山本宮秋葉神社だが、静岡県浜松一帯は昔の遠江の国、徳川家康が治めて勢力を拡大し、やがて関東に進出し天下取りの基礎を築いた縁の地である。譜代の家臣として家康に従って関東に入り、この大谷の地を治めた森川氏が秋葉神社を信仰したのもうなずける。

本社の秋葉神社を有名にしているものに「秋葉の火祭り」がある。荒々しい勇壮な火祭りで災いを治める発想は「火には火を」という武家や農民の意地のようなものを感じる。そして火祭りをめぐる巷の逸話が講談や浪曲に出てくる「清水次郎長伝」の題材にもなっている。

秋葉神社の関東総社が大宮にあるのをご存知だろうか、昔は氷川神社と並んで一二を争う盛隆振りだったとか、戦国武将、山之内一豊一族の陣屋が指扇にあり、その守護神であった他、紀州徳川家の祈願所でもあった。秋葉神社は武家に人気のある神社の一つのようである。

秋葉神社関東総社（指扇）

大谷集落の秋葉神社は小さな社で、まさに森の鎮守さまである。「かくれんぼ」や「鬼ごっこ」をして日が暮れるまで遊んだ子供の頃を想い出させてくれる。親達が忙しくて、子供をかまってくれなかった時代、村の「鎮守さま」はみんなで集まって遊んだり喧嘩をしたり、ラジオ体操の場所であったり、草取りや掃除をしたり、子供達の「遊びの場「学びの場」」であった。

玉太岡神社（岡）

歴史

近世、岡郷と呼ばれた和田吉野川の右岸に位置する地域は、北から上岡、中岡、下岡と三つの地区からなっている。中でも当社の鎮座する下岡は最も早く開発が進んだ台地といわれ、その地内にある行基の作と伝えられる十一面観音像を本尊とする光福寺は、開山の章山が永禄十年（１５６７年）寂と伝えられる寺院である。この光福寺の境内には、国指定にもなっている元享（げんこう）三年（１３２３年）の宝篋印塔があり、その銘文に「武州比企郡玉太岡四国山光福寺」とあることから、当時この地が玉太岡と呼ばれていたことが分かる。

当社は、拝殿にかけられている古い社号額に併記されているように神明宮と雷電宮の合殿である。ただし「風土記稿」には「神明社、雷光寺の持、以上二社共に鎮守なり」と記されており、本来両社は別々の神社であったと考えられる。恐らく神明社は近くにある上吉見領総鎮守の吉見神社（神明社）からの勧請であろうし、雷電社はその寺名から雷光寺にかかわる勧請であろう。神仏分離によって、雷光寺は廃寺になり、当社は明治四年に村社になった。この時、宝篋印塔にも刻まれた当地の古称である「玉太岡」を採って、玉太岡神社と改称した。ちなみに本殿は神明造りで、寛永五年（１８５２年）に再建されたものである。祭祀職は、須田家が永斉・太平・常一・千秋と四代にわたり務める。

信仰

氏子の間では当社は「五穀豊穣の神様」として信仰されている。神明社は本来、天照大神を祀るが、豊受大神を併せ祀る例が多く、豊受大神は穀霊神でもある。それが雷電社の降雨信仰と結び付き、共に穀物の生育に深くかかわる社として信仰された。この地は、古くから度重なる干ばつに見舞われていて、当社に寄せた信仰は切実なものがあったに違いない。

当社の年間の行事は元旦祭・祈年祭(２月２１日)・例祭(４月２１日)・夏祭り(７月１５日)秋祭り（１０月１７日）新嘗祭(１１月２３日)大祓(１２月３０日)。

利（とし）仁（ひと）　神　社（下野本）

当社は北側に無量寿寺、野本小学校が隣接し、西側には野本市民活動センターが隣接している。この地域は都幾川、台地に恵まれ古くから快適な環境で古代より栄えた地区である。

比企郡下には規模の大きな古墳や遺跡が多い。その中でも将軍塚古墳は約115メートルの全長を持ち、北武蔵屈指の前方後円墳である。将軍塚古墳の被葬者については、現在のところ定かではないが7世紀に築造されたものであることが推定されている。当時相応の力を持った豪族がこの地に居住していたことがわかる。

利仁神社はその墳丘上に鎮座している。この神社は藤原利仁の霊を祀る神社であり、内陣には藤原利仁像が安置されている他、社宝である利仁愛用の弁当箱がある。

創建は、延長元年（923年）と伝えられ、元来は将軍塚古墳の北側に隣接する無量寿寺の鎮守で、利仁将軍社と呼ばれていたが、神仏分離によって同寺から独立し、利仁神社と号するようになった。藤原利仁とは延喜15年（915年）鎮守府将軍となり下野に赴いたり、武蔵守を勤めたりした。無量寿寺は将軍の陣屋跡といわれているが、その後平安末期から鎌倉時代の豪族野本一族の館跡の説もある。将軍塚古墳といわれるのは、埋葬者が将軍だった訳ではなく、古墳の上に建てられている神社に祀られている藤原利仁が将軍のためそのように呼ばれるようになった。（栃木県にある関白神社も藤原利仁が祀られているとのことである。）

信仰としては、創建当時麻疹で苦しんでいた帝（後醍醐天皇か）が勅命によりこの神社に奉幣させたところほどなく平癒されたという。このことから古くから諸病平癒の御利益があるとされている。麻疹に罹った時には「お守り石」といい、社殿の穴あき石を一個拝借して護符とすれば軽く済むとされ、治ると倍にして返す信仰が盛んであった。

年間の催事は、元旦祭、祈年祭、例祭、新嘗祭などがある。例祭は古くから無病息災の祭りであるとされている。

氷　川　神　社（下青鳥）

当社は大字下青鳥の上郷の南西に鎮座している。社伝によると、祭神は素佐之男命（すさのおのみこと）であり武蔵国一の宮（大宮氷川神社）から分霊を受け内陣は氷川大明神像を安置し、この杜に祀ったと伝えられている。当社の神が村の開発と治水（水の神）に深く結びついて根付いたものと思われる。本殿は、総欅の一間社流造りで柿葺の屋根、竜、獅子、獏などの彫刻を配しており、建造は江戸後期であると思われる。

元旦祭、四月三日の春祭り、七月十九日の夏祭り、十一月二十三日の秋祭りがあり氏子の人々の信仰も厚くお祭りを執り行っている。夏祭りには前日の宵宮から始まり、この村の子供たちが描いた九十余個の灯篭が境内に飾られ、雨が降れば闇灯篭として趣を添える。また「農業止め」といって骨休めをする日となり大人たちも楽しみのお祭りである。秋祭りは団子を神社に供えこれを頂き食すると、心が丈夫になると云われ、心待ちにしている。

一の宮氷川神社とは、武蔵国の中で最も社格の高い神社のことであり、その御祭神は素佐之男命・奇稲田姫命（くしなだひめのみこと）・大己貴命（おほなむち）（大国主命）で、須佐之男命はヤマタノオロチを退治したことで有名である。当社は「厄除け」の神として、また、奇稲田姫命と結ばれたことで「良縁・縁結び」「家内安全」の御神徳あり、大巳貴命は別名「大国主命」であり「商売繁盛」の御神徳があると言われている。このことで、大宮氷川神社・川越の氷川神社で多くの結婚式があるというのも頷ける。

近くにある神社の謂れについても、改めて神社に詣でて調べてみたい。また、上郷地区の氷川神社の氏子の人達が長く守り伝えた祭祀にその神社への思いがうかがわれ、これからも代々受け継がれていく事を心より願いたい。

鷲（わし）　神　社　（古凍）

当地は古氷、古郡とも書かれ比企郡いにしえの郡家の地であり、当神社の場所に郡家（役所）があったようである。創建は、アニメ「らき☆すた」で話題になった久喜市の鷲宮神社から、平安時代末期の治承 2 年(1178 年)　に勧請して創建された歴史ある神社で、当社は慈雲寺持ちの社として「鷲神社　村の鎮守なり」と云われる。

文化 3 年(1806 年)には、正一位の神位を拝受した。明治初年の神仏分離により慈雲寺の手を離れた当社は、神職の吉本良之進が代わって祭祀を司るようになった。更に明治 30 年代から澤田家がこれを継ぎ、現在奉仕している。末社として八坂、日枝、諏訪、稲荷等ある。

春に悪疫退散を祈って「お獅子渡御祭」通称「おしっさま」という風習がある。4 月１５日に近い日曜日に雌雄の獅子頭を担いで、古凍地区の家を１軒１軒、訪ねながら練り歩く。全体の家々を巡るには、朝から晩までかかるが、最後に、根岸沼に行き、獅子頭をパクパクさせて悪魔を追い、出し祭りは終わる。

夏に五穀豊穣を祈って「神輿渡御祭」通称天王様という祭りがあり、７月１５日に近い日曜日、車に神輿を乗せ、後を祭り囃子、大太鼓、小太鼓、笛、摺り鉦を奏でながら古凍地区を巡る。夕方、子供神輿が境内を巡り、後に大人輿が境内を出て神幸する。

秋には稲刈りの前に盆踊りの奉納がある。

若　宮　八　幡　神　社（石橋）

歴史

大字石橋字若宮地区は、たいへん遺跡が多い地域である。若宮八幡神社境内も古墳になっており、若宮八幡古墳と呼ばれて、県史跡の指定を受けている。この古墳は、横穴石室を持った前方後円墳で比企地方の縄文時代後期古墳を代表するものの一つである。若宮八幡神社の社殿は、その古墳の真上に建てられている。

創祀については、慶長元年（１５９６年）に相州鎌倉（現神奈川県鎌倉市）の鶴岡八幡宮から分祀したものと伝えられ、古墳の石室の入口が開口していることから「穴八幡」と呼ばれ親しまれてきた。現在、この石室の入口には、文化財保護の目的で市の教育委員会によって柵が設けられているが、かつては自由に出入りができたため、太平洋　戦争の戦時下にあっては空襲時の避難場所としても利用された。

また、当社はかつて松山城の城主であった上田氏の家臣、山田伊賀守を祀った社で、今も社殿の下には伊賀守の遺骸を納めた石棺が埋められているといい、『風土記稿』には、明和の頃（１７６４年～１７７２年）、山田伊賀守の末裔、善右衛門が社殿の下を掘ったところ、石棺が確かにあり、その蓋に伊賀守の名がかすかに読み取れたとの記事が書かれていたという。

神仏分離（１８６８年に明治政府が布告した祭政一致、神祇官再興に伴って生じた、神道と仏教を分離させる政策）後、それまで近くの天台宗定宗寺住職が管理していたのが明治４年（１８７１年）に村社となった。

信仰

当社は氏子を温かく見守り、悪病や災害から村を守ってくれる村の鎮守様として信仰され、元旦祭（１月１日）・入学児童祈願祭（４月第１日曜日）・祈年祭（４月１５日）・秋祭り（１０月１５日）の年４回祭典が奉仕されている。

当社は定宗寺の管理を離れた後、明治４年（１８７１年）以降は村社となり、氏子の手によって当番を決め例祭を行ってきた。しかし近年は氏子を離れる家が多くなってきているという。また、児童文学作家、打木村治氏の作品『天の園』は、明治時代後半～大正時代に作者が小学校時代に過ごした唐子村（現在の唐子地区）を舞台に描いた全６部の長編小説で、この小説の中にたびたび若宮八幡神社と若宮八幡古墳の穴のことが登場する。その関係で最近では散歩コース等が作られ、天の園文学研究グループなど多くの人々が訪れている。

唐　子　神　社（下唐子）

お諏訪様と獅子舞

歴史

神社の創建は、応永１８年（１４１１年）９月１８日、時の領主左兵衛佐藤原重時が秩父郡の椋神社の分霊を地内の字坂東に奉斎し白髭大明神とした。この地は都幾川の右岸低地であり時々氾濫にあった為、天和２年（１６８２年）に地頭菅沼吉広が社地を坂東から現在の地（下唐子）に移し、黒田市郎左衛門が総代となり社殿を造営した。当社は５２段もの石段を登った高台に位置している。地内西側にあった教学院は、現宮司〈渡辺一夫氏〉渡辺家の先祖で松山町観音寺配下の本山派修験であった。明治４年（１８７１年）に村社となり明治５年（１８７２年）に字高本の伊奈利神社を合祀し、明治４４年（１９１１年）には字法養寺の諏訪神社、字滝下の粟島神社（教学院の薬師堂）、字内手の稲荷神社、字久保の八幡神社の４社を合祀し村名をとって唐子神社と改めた。

唐子神社本殿

祭礼

夏の例祭は諏訪神社の古くからの例祭日である７月２６日、２７日の両日になっている。氏子や近隣の村人からは“お諏訪様”と呼ばれていた。諏訪神社の神使いである蛇を描いた小絵馬を借りて養蚕室に置き蚕を鼠除けのお守りとした。例祭日の夜は”お籠り“と称して大変な賑わいであった。東松山はもとより川島、小川、嵐山など比企近隣から多くの参拝者が押し寄せた。神楽殿では東京からの歌舞伎が上演され大いに参拝者を楽しませた。又この日は五穀豊穣を祈り獅子舞も奉納された。秋の例祭は１０月中旬に白髭大明神の祭礼で豊作など感謝し獅子舞が奉納される。

神楽殿

唐子の獅子舞

獅子舞の由来は武田信玄の家臣、馬場美濃守の子孫が今から二百数十年前、下唐子に転じて、白髪大明神を祭り獅子舞が奉納されたのが始まりと云われている。現在の獅子舞は一人立の太鼓を抱えた三頭の獅子で、法眼獅子、雄獅子、雌獅子が太鼓や笛の音に合わせて舞われる。唐子の獅子舞は流れるような美しい舞である。舞の奉納は前庭と後庭があり、前庭は「どじょうねこ」「干し物返し」「法眼の出」などで後庭は「ヒャヒャリコ」「二頭の出」「雌獅子隠し」などが順に行なわれる。昔は唐子神社から丸木美術館近くにあった合祀された諏訪神社迄約１Kmの街道通りを舞っていたとのことだが、現在では神社の社務所からホラ貝を合図に49段の石段を登りつめ社殿に向かって舞われ奉納される。舞手は地元の保存会で指導を受けた子供が務めている。地域のコミニュテイーを通じ伝統が継承されており大変素晴らしいことである。

高　坂　神　社（高坂）

やつるぎさま

当地高坂は台地上にある集落で古墳・遺跡が多くあり、境内には剣前古墳と呼ばれる後期古墳がある。地区内の反町遺跡では４世紀頃の竪穴住居跡も見つかり地域の歴史がうかがえる。中世は八王子街道の要所で宿場町として栄えた。現在も反町遺跡跡にピオニーウォークが出店、その後も周囲に続々と商業施設が開店、加えて新興住宅街が今なお増加しており、市内でも最大に賑わっている地区の一角に佇んでいる歴史ある神社である。

その発祥は西暦８００年代始め、坂上田村麻呂がこの地を通ったとき、日本武尊（ヤマトタケルノミコト）が東夷征伐の際ここに陣地を置いた故事にちなみ、八剣明神社（やつるぎさま）と号したことに始まり、当社の裏には「日本武尊お祓いの清水」と呼ばれる泉がある。武士の神として信仰され祭神は日本武尊で、逝去された際、御霊が白鳥になって飛んだ伝えから白鳥が神霊とされる。１３００年代は高坂刑部の祈願所として、江戸時代は加賀爪氏の守護神として崇拝されてきた。

当社が高坂神社と改称されたのは明治４２年のことで、これは政府の合祀政策により日枝、天神、雷電、八雲神社等が合祀され地名をとり高坂神社となったものである。

当社の祭事は元旦祭、春祭り（３月３０日）、例祭（４月１５日）、夏祭り（８月１．２日）、秋御日待祭（１０月１７日）、秋祭り（１２月１５日）、大祓（１２月３１日）と年７回あるが、このうち例祭には「春祈祷」夏祭りには「天王様」の通称がある。特に夏祭りは八雲神社の例祭で高坂の天王様と呼ばれ賑わっている。祭典は盛大に行われ、神輿が「町内渡し」と称し巡行する。夏祭りは市内の祭りと日程が重さらないこと、周辺の活性化もあり、現在も市民の参詣も多い。

当神社は主要道路に面していながら一歩入ると静寂な落ち着いたパワースポットで、裏のせせらぎ縁道は人気の散歩コースになっている。

宮　鼻　八　幡　神　社（宮鼻）

高坂台地南部は、越辺川沿いの低地に半島状に突き出している。当社は、ちょうどその先端にあり、その立地から宮鼻と呼ばれた地に鎮座している。

御祭神は応神天皇で当然ながら本社は九州大分県にある宇佐八幡宮である。古来、幾多の武士により信仰されてきたが、江戸時代に宮鼻地を知行した旗本横田氏は、武士の神様として崇敬されている八幡神社に、自らの兜の八幡座（兜の鉢の頂上）を納めたと伝えられている。

「八幡社　村の鎮守なり、本地仏弥陀を安ず」とあるように、八幡神社の御正体は「阿弥陀如来の懸仏」として尊敬されており神宝として大切に保管されている。

御神木・大欅

境内には、幹周り約 7.8 メートル、樹高約 8 メートルの市指定文化財となっている大欅があり、樹齢約 700 年と推定されている。

八幡神社の御神木とされてきたこの欅は、古くから宮鼻の人の心の拠り所であり、農作業の合間に涼をとる憩いの場所として親しまれてきた。

春例祭は現在4月第1日曜日に行われ、鎮守八幡神社に奉納される。

春祈祷、悪病除けに部落内を行列して歩く「廻り獅子」が行われていた。

当社の信仰を語る上で春秋の祈年祭で重要なのが「おくにさん」である。

おくにさん

地元の童歌にも「山のおくにさんは山越えて里越えて野越えて」と唄われる。「おくにさん」は、顔の赤い猿の姿をした高さ 1mほどの人形（猿田彦之命）に、錦織の着物と緋色の袴を着せ、頭に烏帽子を付け、幣束と扇を持たせ、山の神様で獅子舞行列の先頭に立ち、道案内を務めている。

（風雨従順：五穀成就：氏子快楽：今上皇帝：軍民和合：天下泰平：八幡大神）を心願するもので、　この獅子舞は、昔、風水害にばかり合い、村人たちが悲惨な毎日を送っていたので、獅子舞を神社に奉納することになったのが始まりと言われている。

６．まとめ

私達は東松山地域に鎮座する４１社の中から、地域や神社の種別を考慮して１３社を調査・研究対象としました。

調査は各神社の成り立ち、歴史、祭事内容、更に地域との関わりなどを中心に現地調査を含め実施しました。各神社において実施されているお祭りや獅子舞等の祭事についても見学しました。今まで神社への関わりは各自違うと思いますが、この調査・研究により、成り立ちや歴史、各祭事の意味等を理解することが出来、大いに参考になりました。また、お祭りの意味や歴史を学んだ事により、これからお祭りに参加する際の楽しみが増えました。そして季節ごとの祭事を子供達に伝承するため、地域のコミュニティーが形成されていることが分かりました。

私たちの社会では、神社の役割は地域のコミュニティーの形成になくてはならない存在です。最近各地で大震災や大災害が発生していますが、この調査・研究を通じて神社はその復興において、地域住民の大きな心の支えや絆の中心となっていることも理解出来ました。

最後に本研究課題に際し神社に関する基本的な知識や箭弓神社についてご教授頂いた澤田宮司様並びに、きらめき市民大学の事務局の皆様に感謝申し上げます。

参考文献

・埼玉の神社（埼玉県神社庁）
・東松山の今昔あれこれ（東松山市本町研究会）
・東松山市の地名と歴史（まつやま書房　岡田　潔）
・日本の神社がよく分かる本（光文社　戸部民夫）
・神社に秘められた日本史の謎（浅泉社　新谷尚紀）
・日本の神様（洋泉社）
・各神社インターネット・その他